

ヒュームにおける性格と行為——人格の同一性の観点から——

真船えり (Eri Mafune)

日本大学・慶應義塾大学・非常勤講師

ヒュームは、『人間本性論』において、人格の同一性の問題を、「思考と想像に関する場合」と、「情念あるいは自己自身についての関心に関する場合」の 2 つに区分し、前者については、第 1 巻「知性について」において、「人格の同一性について」という 1 節を設けて論じた。しかしながら、後者の問題は、「情念」というからには、第 2 巻「情念について」で、「自己自身についての関心」については第 3 巻「道徳について」において、論じられていておかしくないのであるが、ヒュームは特に一節を設けて論じてはいない。そのため、ヒュームの人格の同一性の議論は、知性論における議論だけが取り上げられ、ヒュームは、人格あるいは人物の同一性に関連した実践的な面をまったく無視した、と考えられてきた。近年ようやく、第 2 巻における自己についての議論を含めてヒュームにおける人格の同一性の問題が論じられるようになり、性格についても取り上げられるようになってきた。また、行為と性格との関係についても議論されるようになってきている。

ヒュームにおいては、行為に対する道徳的評価は、性格に対するものである。そして、性格と行為のあいだの結合には必然性があるという。また、行為と人物とのあいだの因果関係により、その行為の功罪を問うことができるとヒュームは考える。

本報告では、ヒュームは、人格の同一性の問題の後者の問題、すなわち「情念あるいは自己自身についての関心に関する場合」について、『人間本性論』第 2 巻「情念について」、第 3 巻「道徳について」において、「人格の同一性」の議論として明示的ではないが実質的には論じており、それは第 1 巻「知性について」の段階から構想されていたこと、したがって、ヒュームにおける人格の同一性の問題は、全巻を通して一貫して論じられたこと、を明らかにするために、人物の性格から行為への推論、行為と人物との因果関係に関する議論を取り上げ、それがヒュームの人格の同一性の議論全体において重要な役割を果たしていることを考察したい。

はじめに

1. ひとつのシステムと「共和国」の比喻
2. 道徳的評価の対象としての性格
3. 性格から行為への推論
4. 行為の功罪と人物

おわりに

(なお、申込時のタイトルに副題を付した。)